The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日常と非日常のあわいで、ゆらぐ : 性風俗を利用する男性客イメージ再考を通して
Author(s)	志田, 衣
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 239-255
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【臨床哲学の書きもの】

日常と非日常のあわいで、ゆらぐ
－性風俗を利用する男性客イメージ再考を通して－

志田　　衣

はじめに

不思議なことに、性風俗というテーマは二項対立の図式と相性が良いようである。その代表例が「性の商品化」論争とセックスワーク論である。前者においては「良いか悪いか」と「売る側と買う側」という二項対立の図式が持ち込まれる。後者は「労働者か奴隷か」という二項対立を前提として、性風俗での営みを「仕事」として描き出す。

さらに、二項対立の図式は、性風俗という営みをデフォルメして描き出すことに長けている。中でも「性の商品化」論争における「性を買うことは良くない」という主張は、支配的で暴力的な男性客像を成立させた。曰く「買春男性とは、金銭を介することで、生身の女性の上に（女性に対する）幻想を重ねている。生身の女性から主体性を奪い取る形で幻想を重ねることが、支配なのであり、この支配的構造が買春男性に快楽をもたらす」と説明される（杉田1999; 立岩1995; 若尾2004など）。そこに、過去の買春経験を懺悔する男性があらわれると（谷口1997）、賞賛が向けられる。一方、性風俗で働く人々の声を出発点として、「セックスワークとは労働である」と高らかに宣言する議論は、ポジティブで行動力のある労働主体を印象付ける（SWASH 2018など）。

また、先行研究として、働く女性たちの実態に迫る研究は行われている。たとえば、文化人類学におけるフィールドワークを含んだ研究の中で、個別の店舗で調査を行った結果がまとめられている（熊田2017; 田中2014）。一方で、客の視点から性風俗での営みを捉える分析は皆無ではないが（多田2009）、男性客像の再検討や先行研究の問い直しとしては不十分と言わざるを得ない。

本研究は、男性客への着目を通して「性を売る・買う」と漠然と捉えられている行為の内実に迫る。二項対立の図式では見逃されるような、性風俗という営みの側面を描き出すことを目標とする。そこで「遊び」と「ふれあい」という二つの観点を採用し、これらを結ぶものとして日常（性）と非日常（性）を導入したい。非日常性に関わりながら生きる男性客の姿をまなざし、性風俗という場が、今日の社会にのこされた、余白としての「遊び」の場であることを示す。

なお、本研究の対象は、日本国内の性風俗店とそこで行われるサービスである。大前提として、性風俗店の多くは、風俗営業適正化法や売春防止法に則って営業を行なっており、性交（女性器への男性器の挿入）を伴わない性的サービスを提供している。その内容や時間、店舗のコンセプトなど、様々な要因によって、性風俗店の業態は実

に多岐にわたるが、本研究では業態ごとの差異を細かくは問わない。本研究の掲げる目標達成にあたっては、その差異は大きな問題にならないためである。

また、性風俗業界では女性キャストを、その年齢を問わず「おんなのこ」と呼ぶ慣習がある。本研究では、性風俗に関する議論として近接するセックスワーク論との差別化の意味も込めて、「おんなのこ」の呼称を採用する。一方で、本研究で「キャスト」と表現している場合には、おんなのこに限らないサービス提供者全般を指す。

１　性風俗という遊び

「性風俗（フーゾク）はあくまでも遊びだから」という言い回しを、一度は聞いた覚えがあるのではないか。また、性風俗で客とキャストが行う一連の行為は、「プレイ」「（お）遊び」と呼ばれている。冒頭の言い回しでの「遊び」が示唆するのは、性風俗で女性との間に結ばれる関係は、虚構であり、本来あるべきパートナーシップとは質的に異なる、ということだろう。ただ、性風俗における関係性が虚構であるからといって、それが現実で結ばれる人間関係よりも劣っており、取るに足らない、と解釈するのは尚早であろう。むしろ、その場限りの「遊び」だからこそ可能になるような関係性もあるのではないか。

１－１　「遊び」とは

性風俗の「遊び」としての側面を見ていくにあたり、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』における「遊び」の定義を参照することからはじめたい。

本研究でことわりなく「遊び」と述べるとき、それは何か具体的な行為を指すというよりも、その行為・事象のどこからどこまでを「遊び」と指すことはできないけれど、確かに横たわっている行為形式を意味する。「」を付した「遊び」については、社会や性風俗において一般に「遊び」と認識されるものを指す、と区別しておく。

さて、ホイジンガは様々な言語や文化現象（芸術や戦争）における「遊び」を検討し、遊びの条件を模索していく。それらがまとめられているのが次の文章である。

> その外形から観察したとき、われわれは遊びを総括して、それは「本気でそうしている」のではないもの、日常生活の外にあると感じられているものだが、それにもかかわらず遊んでいる人を心の底まですっかり捉えてしまうことも可能な一つの自由な活動である、と呼ぶことができる。この行為はどんな物質的利害関係とも結びつかず、それからは何の利得も齎されることはない。それは規定された時間と空間の中で決められた規則に従い、秩序正しく進行する。またそれは、秘密に取り囲まれていることを好み、ややもすると日常世界とは異なるものである点を、変装の手段でことさら強調したりする社会集団を生み出すのである（ホイジンガ2019, 43-44（ママ））

ここで示されている条件として、①自由である、②虚構の世界である、③利害を求めない、④時間・空間的に限定されている、⑤特定の規則をもつ、の５つが確認できる。

では、性風俗での「遊び」は、これらの定義のもとで如何に整理されるか。まず⑤は十分に当てはまる。性風俗という場は法規制のもとで成立している上、性風俗の利用にあたっては様々なルール（明言されているものからそうではないものまで）が存在するからである。

次に②と④だが、性風俗ではキャストも客も、その場限りの「誰か」のフリをすることが往々にしてあることから確からしいと言えよう。そうした虚構は(例外もあるが)プレイの内に限定されている。この点は第２節で論じることとしたい。

そして、難しいのが①と③だ。キャストは対価によって発生する責任からプレイという「遊び」に参加させられている。ただし、客が何らかの満足を期待して対価を支払い、それによりキャストが義務として参加することではじまるプレイの中で、客とキャストが自発性を持って遊ぶようになることは、決して不可能ではない。この点を第３・４節で論じる。

１－２　虚構の具現化という遊び

性風俗と虚構との結びつきを検討するにあたり、まず取り上げたいのが、飛田新地のようなちょんの間・旧遊郭である。飛田新地を利用したある男性は「日常生活とは別次元で、エネルギーを補給するところとして」飛田新地が今後も残ってほしいと語る（井上2011, 19)。また別の男性は「他の風俗はスレた子が多いので、デートしたいと思ったことはないが、飛田は別格。二十分間の疑似恋愛なのかもしれません……」と語る（同前, 20)。飛田新地（特にメイン通り）で行われる遊びとは、虚構としてのそれであって、美しい女性との一回きりの逢瀬であるようだ。遊郭建築や、おんなのこを照らす煌びやかなライトがつくりだす特殊な空間と、20分という短い利用時間は、互いの素性に触れる余地を与えない。だからこそ、男性客はおんなのこに夢を見ることができる。

また、日常のパートナーシップにおいては達成困難な性的願望を満たすプレイも、虚構と言って良いだろう。ニューハーフヘルスでは、ノンオペ（男性器が付いている）の方が需要があるという（中塩2018, 266)。ニューハーフヘルスで働いていた畑野とまとは「客層はノンケの男性です。(中略）すごく矛盾した話なんですけど、女性に犯されてみたいという願望が男性にはあるみたいで」(同前）と語っている。日常生活におけるパートナーが女性である以上は、女性に「犯される」という体験は実現し難い。

ここまでの例では、明らかに日常生活と一線を画すような虚構を、虚構であると自覚した上で、それを具現化するプレイを行なっていると言えよう。性風俗では、それだけではなく、客が無自覚に（性的な）虚構・妄想を実現している場合もある。都内のヘルスで働く桃さんは、客に自己開示をあまりしないよう心がけている。あるとき、浣腸プレイを好む客から質問攻めにされた際、「はあ」とだけ答えていたら、その客の中で桃さんは「すごい浣腸が好きで高校時代から野外でもやっていた」という勘違いができあがっていたという（熊田2017, 95)。また、「感じている」演技について、マリさんは「ふりですよね。まあ、それはまあやっぱりサービスの一環でしてあげないと悪いんで、だからちょっと痛くても、「ここがイイの？」ってきかれたら、「うん」

とか言うけど、「イテーんだよ本当は」みたいな、お前へったくそだなとか……」（田中2014, 47）と答えている。

客の望みを察して、それに合わせた振る舞いをキャストがする（桃さんの場合は、客の解釈に委ねているという方が正確だろうか）という事態は、客のごっこ遊びにキャストが付き合っている状態と解釈できよう。

さらにそこでは、客も演技しているかもしれない。ここでの演技の意味は、意識的に何かの役を演じるというよりも、（半ば無意識に）日常的な自身の振る舞いとは異なる立ち回りをする、という事態を指す。たとえば、会社内では上司の言いなりになっている人が、性風俗ではキャストに対して強気な振る舞いをする場合が挙げられよう。

そもそも、性行為・セックスそれ自体が一種の演技なのではないか。セックスの定義づけを試みれば、難解な議論に立ち入ることになるため、次の発言を検討するにとどめたい。

> みんな、セックスは正直にやるべきだと思ってるわけじゃないですか。愛がなきゃいけないとか、演技しちゃいけないとかさ。でもセックスって、非日常だから楽しいってところもあると思うんですよ。いつもの自分じゃない私、みたいな。そういうコスプレ感というか、ある程度の虚構性がないと、素の自分だと照れちゃってダメなんですよね、私は（中村2017, 161）

この発言に続けて中村は、自身の経験を踏まえ「風俗だって、結局は虚構」であり「別の自分になってセックスを売る女になる」行為なのだと述べる（同前）。また、西村清和は、コケットリー[1]の戯れの本質は、双方がひとつの解を見越した上で成立している独特の関係にあると論じる（西村1989, 120）。よって、セックスを売るというのは、単に性的接触を売るのではなく、すでに了解されている解としての「セックス」を売ることだ、と言えないだろうか。

性風俗における特殊な用語として「マグロ」（客からおんなのこへの接触に対して、おんなのこが「感じている」反応がないことを指す言葉）がある。おんなのこの「マグロ」を、サービスとして不十分と評する事態は、「おんなのこが感じているふりをすることへの期待」の裏返しである。それは、性風俗でのプレイを、過剰な性的虚構を通じてコミュニケーションを行うものと了解していることを意味する。

しかし、セックスそれ自体が演技としての性質を有した行為だとすれば、性風俗で行うそれと、そうではない空間・関係性で行うものと何が違うのか、という話になろう。

その差異をもたらす点として指摘できるのが、性風俗の非日常空間としての性質[2]である。性風俗において必要なのは、その場限りの人間関係を結ぶのに求められる情報開示だけである。さらに、それらが日常生活からすれば偽りであっても構わない。な

---

[1] 女性特有のなまめかしさ。媚態。

[2] とりわけの都市部の性風俗店における特徴として、部分化された「自己」の呈示が容易であるという点を主張し、それによって可能になるおんなのこのふるまいを論じた研究もある（熊田2017）。

ぜなら、性風俗での客とキャストとの関係は、その場限りであり、その前後の関係性への一切の責任が（基本的には）存在しないからである。日常生活での人間関係のように、社会的身分や立場にふさわしい振る舞い、過去の自分の言動との整合性、などを意識する必要はないのである。

１－３　他者と出会う営みとしての性風俗

男性客が、自身の望む虚構を具現化するという遊びを行っているとして、それはなぜ、自慰行為ではなく、生身の他者を巻き込むセックスである必要があるのか。

以下は、中谷と阪本のお笑いコンビ・マユリカのラジオからの引用である[3]。中谷は3Pを提供する性風俗店を利用している。その店舗はソフトSM性感（ハードなSMプレイではないが、利用客がマゾ・おんなのこがサド、という役回りが前提。拘束や目隠しなどのサービスが受けられる。おんなのこへの接触はできない）だというのだが、中谷はプレイ中に目隠しをされている状態で、おんなのこの姿を見たいがために目隠しを外してほしいと懇願したりする、と話す。それに対し、阪本が困惑しつつ問いかける。

阪本　恥ずかしくないの？
中谷　そこはまずコンセプトがそう（SMのテイストが入っている）やから。なんていうか、素の状態じゃないねん。全員。ちょっと役(に)入ってるというか。
阪本　（キャストの振る舞いに、中谷は）つられるん？
中谷　女王様までいかへんけど、二人とも、ちょっとその、痴女というか、のスイッチ入れてんねや。
（中略）
中谷　恥ずかしさとか、なくなってくんねん。
阪本　ええ～？
中谷　俺も最初、思ってたで、そうやって。でもほんま解放されて、全部言ってまう。気持ちいい～とか。

そのあとも中谷は「解放」と何度か口にする（「解放」状態を「楽しい」とも評している）。この「解放」が具体的にどのような状態を指すのかは明言されていないが、「普段ではありえない振る舞いをする状態」が含意されているのは確かだろう。
これをふまえると、プレイにおいては、客がその場を支配して虚構を実現するだけではなく、キャストがつくりだす虚構に客が巻き込まれることもあり、それを望んでいる客もいる（中谷はその店舗でのプレイを気に入って何度か利用している）ようである。習慣化された振る舞いから逸脱した言動は、意識的にできるものとは限らない。そうした「解放」状態を可能にするのが、虚構に巻き込まれるという事態なのではないか。

---

[3] ラジオ関西Podcast『マユリカのうなげろりん！！』第93回（2023/06/10公開）
文字起こしは筆者。適宜、文脈補完のために（）内に指示内容を追記している。

性風俗でのプレイは、虚構を具現化するごっこ遊びとしての側面を持つということは、第２節で確認してきた。ここで演技をめぐる山崎正和（1983）の議論を参照したい。演技に限らず、人間の行動はリズムによって解釈可能とされる。リズムとは「意志に先立ち、意志を誘ひ出すだけの力でなければならず、しかも、意志を強制し、それを完全に圧倒するやうな力であってはならない」（山崎1983, 88）という。演技とは、機械化や効率化により日々の行動が型に嵌められた生活において失われた、リズムの両義性を取り戻す営みだという（同前, 104-105）。

また、近代以降「一貫した自我」は自明視されてきたが、自我とはリズムによって成立するのであって（同前, 196-197）、一定のリズムを繰り返すことでその一貫性が保たれているに過ぎないのであり、自我とはリズム同様両義的な存在である（同前, 233）。他者との共同行動としての演技は、他者と協働したり対立したりしながら、共同のリズムをつくる営みである（同前, 243）。よって、共同のリズムを通じて新たな自我に出会うことにもなる。

さらに、山崎によれば、演技とは「対話」ではなく、その演技を傍受する者の存在が（その実在を問わず）想定されている「鼎話」の形式をとるという（同前, 23-26）。そうした傍受者の存在によって、自己を対象化しようとする他者からのまなざしは不問に付され、われわれは恥や照れ臭さから逃れ出し、自己抑制からの解放を手にする（同前, 258-260）。

したがって、「スイッチを入れた」キャストとのプレイを通じて、恥を忘れ、その末に中谷が感じた「解放」は、性風俗店という舞台において繰り広げられる演技が可能にした、自己変容でもあったのではないか。

以上から、「解放」をもたらすような遊びとしてのプレイは、一人で行うマスターベーションとは、明らかに異なる営みである。能動的であれ受動的であれ、虚構を具現化する中で他者に出会い、その出会いを通して自己を変容させることに、性風俗での遊びの醍醐味の一つがあると言えるのではないか。

１－４　遊びだけど労働

ここまで、性風俗での「遊び」とは遊びだという前提で論じてきたが、キャストからすれば、それはまぎれもない労働である。キャストは客の望む虚構を実現するために、それに合わせて振る舞ったり、客を虚構の世界に巻き込むべくはたらきかけたりするのであり、この労働なくして性風俗でのプレイは成立不可能と言えよう。

一方で、やはりと言うべきか、労働であるがゆえに遊びの可能性が狭まる場合もある。たとえば、店舗の方針として接客の流れが細かくマニュアルで規定されていた場合、客ごとに異なる嗜好や身体、その場での偶発的なやり取りに基づく展開などが生まれる余地がなくなってしまう。マニュアル化されたプレイを「おもしろくない」と評するキャストの語りもある（熊田2017, 116）。

また、西村は遊びにおいて「遊び手と遊び相手との同調にあって、遊び手とは、同時に遊ばれるものである」とし、「自由の主体による遊び行動への決断は、だからといって、本当の意味でのあのしなやかな同調とはずむこころの遊びを生じさせるとはかぎ

らない」（同前, 99-100）と説明する。裏を返せば、性風俗でのプレイという「遊び」が労働だからといって、キャストがその中で遊びに興じることはないとも限らないのである。そもそも、労働と遊びとはそう簡単に切り離せるのか。

大沢正道は「労働が共同労働、社会的労働であるのは、たんに技術的な、経済的な必要を契機とするものではない。（中略）より本質的には、社会的必要――社会的欲求に根ざしている」（大沢1994, 55）と主張する。「社会的欲求[4]」とは、飢えや渇きや性的欲求と並列される人間の根源的欲求であり（同前, 50）、労働における作業歌や共同作業は、一つのリズムの中で一体化することを通して、社会的欲求を充足するものなのだ（同前, 88）。

さらに、遊戯においては、歌や踊りが多くの場合に集団で行われるという事実を踏まえると、リズム性を孕んだ遊びは、複数人の参加を前提としている（同前, 135）。遊びにおいても人と人との交わりは不可欠であり、社会的欲求の充足が求められているのである。

大沢は、今日の社会に近しい形態を想定しつつ「人間はいろいろな目的をもって集団を作る。（中略）さまざまな集団が結ばれるが、それらの多くは社会的欲求の充足を主目的として作られるものではない」という（同前, 136）。「それに反して、遊戯を軸とする集団は社会的欲求の充足を主目的としている」ともいう（同前）。ただし、労働に限らず、今日の社会において、社会的欲求が直接的に叶えられる機会はどれほどあるのだろうか。そう考えると、性風俗という労働に支えられた遊びの場は、人と共にありたいという社会的欲求を充足するための場だと言える。共同労働が、社会的欲求の充足という点では遊びと共通点を持っているというのならば、キャストの労働を下敷きにしつつ客がキャストと成立させる遊びは、さほど非人間的な営みというわけでもないのではないか。

2　性風俗というふれあい

性風俗とは、「性を売り買いする」以前に、ひととひとが出会う場所であり、（一切接触を伴わないプレイをする場合もあるが）基本的にはひととひとが触れ合う場所である。

ただ、性風俗を利用する主な目的はまず性行為である。おんなのこが「客をイカせようと（＝射精させようと）頑張る」「イってくれないと困る」と言ったり、客が一度イっても「時間がまだあるから」ともう一度プレイを要求したりすることから、それは確かだろう。

しかしその他にも、男性客が「癒し」や「イチャイチャ」を求めていることを認識しているおんなのこの語りは散見される（田中2014, 40など）。また「人妻アロマオイルマッサージ」店で取材をした田房永子は、店長直伝のテクニックとして教えられて

[4] このアイデアはショシャールによるもの。ショシャールは、動物や虫の社会についての知見と比較しつつ、人間の社会の独自性を検討する試みの中で、人間社会における社会（的）欲求と性欲とを区別可能なものとして論じている（ショシャール1957, 42）。

いたことが、「日常では味わえない失神寸前の桃源郷的テクニックなのかと思ったら、基本マナーみたいなことだった」という（田房2015, 30）。それは裏返せば、客が求めているのは技術的な巧さだけではない、もしくは技巧以上に求められているものがある、ということではないか。

２－１　男性客の身の上話

性風俗でよくあることとして、愚痴などを吐露する男性客の身の上話が挙げられる。みさきさんは、自身が相手をする客には、甘えたい・慰めてほしいと望んでいる男性が多いといい、「きっと奥さんや彼女に言えないことも、見ず知らずの私なら言いやすい」のだろうとその背景を分析している（松沢2000, 87）。また、常連客が自身の同僚の葬式に参列した帰りにみさきさんに会いにきて、「家では泣けないから」と涙を流していたという話が紹介されている（同前, 88）。こうした「弱音や感情を語れない男性」は、男性学においてしばしば指摘されてきた（伊藤1996, 113-114; 西井2021, 44; 澁谷2009, 20-25）。そこには、男性の内面の開示に対する社会的抑圧もあるだろうが、それだけではなく、他の男性よりも優位に立ちたいという競争意識や、弱みを見せるのは恥だという意識があるようにも読める。

先ほどのようなふれあいの特徴として指摘しうるのは「その場が不安や悩みを解決することを志向していない」ことである。仕事をする場合、何か問題を抱えていたとして、その問題によって引き起こされる不安それ自体は「問題」ではなく、その問題を解決することこそが「問題」として扱われるだろう。不安をどうしようかと考えても、肝心なその問題を解決しなければ「意味がない」のである。しかし、実際のところは、不安や悩みをただ受け止めてもらうだけでも意味はあるのではないか。

性風俗においては、客は悩みを解決することを求めて語りを紡ぐのではない。不安や愚痴を聞いてほしいのであって、そこで客が求めているのは、ただ共感あるいは肯定を得ることではないか。実際、共感を下敷きにしながら接客を行うおんなのこもいる（熊田2017, 106）。また、共感や肯定ともちがい、「客を否定しない」ことを心がけるおんなのこもいる（同前, 98-99）。客の言動を否定しないことは、客に共感するというよりも、客の振る舞いに合わせるということに近いだろう。

ことわっておきたいが、筆者は客を否定しなかったり、肯定したりする接客こそがあるべき姿なのだと言いたいわけではない。ここで主張したいのは、男性客とは日々なにかしら否定され、抑圧されていると感じているようだ、ということである。もちろんそれは、男性客に限らず、誰だってそうだろう。とかく、自身が日常的に否定・抑圧されているという状態に無自覚だとしても、男性客が「自身を否定されない」状態を求めており、そうした状態に居心地のよさを感じているのは確かなようなのだ。そしてそれを求める場所は、家庭や同僚、その他コミュニティではなく、性風俗なのである。

> 出張で東京に来る男性は、営業で一日中働いて、ビジネスホテルの部屋に帰ってから、今日一日、一言も自分の本音を話していないことにカップラーメンを食

べながら気づくそうです。

そういう時に、全くしがらみのない相手だったら本音が出せる。しかもお金を出しているから精神的にも割り切れる。そうした空間は風俗しかない。愚痴も寝言も言えるし、女々しいことを言っても恥ずかしくない。お互いパンツを下ろしているんだから（坂爪2016, 166）。

抑圧されず、しがらみなく振る舞うことのできる場所が、性風俗の他にない。少なくともこうした男性客にとって、性風俗でのプレイは生きていく上での切実な営みと言えるだろう。

２－２　ふれあいがもたらす語り

さらに、家庭や職場とは異なるサードプレイス、という点だけでは語れないような性風俗の側面もあるのではないだろうか。それが性行為、つまり身体のふれあいの介在である。

東日本大震災の後に、宮城のデリヘルで勤務していたユキコさんは、様々な男性客とのエピソードを語っている。震災発生後、避難所生活が続くなかで、インフラが徐々に復旧し、ラブホテルが営業を再開すると、お風呂に入るついでにデリヘルを呼ぶ客が多くいたという。たとえば次のような語りだ。

用心して自分のことを全然喋らない人とかもいるんですよ。でも、そういう人でも、プレイが終わってお風呂に入ったあとで、『あんた、地元？　俺、石巻で、家ねぐなったんだあ』とか語りかけてきて、『おめえんとこは大丈夫だったのか？』って。それで私が『大変だったんですねえ。うちも実家がなくなっちゃったんです』と言うと、『ふーん』って一瞬考えるんです。そして『そっか、実家ねぐなったのか？』って。それで『おとっつあん、おかっつあんは？』と聞かれて、『うーん、波で流されちゃってね』と答えると、『なーんだっけや』みたいなね。みんなそこで、ぶっきらぼうだったのが、がらっと急に優しくなったりするんです（小野2016, 153-154）。

ここで客がユキコさんに口を開いた背景はいくつかあるだろう。まず、サードプレイスとしての性風俗という空間である。自分の生活には関与しない性風俗という非日常空間での相手になら、自己開示が容易にできる。加えて、もう一つの要因が、皮膚を介してのコミュニケーションではないか。客は当初、警戒心からか、自分のことを語ろうとしていなかった。しかし、温かいお風呂に入ったこと、人肌に触れたことによって、その警戒心が解けていったのだろう。その上、ユキコさんの境遇と自分の境遇を重ね合わせて共感したことで、自己開示に至ったのではないか。

本来プライベートなものであるはずの性行為を、そこに至るまでの親密さの構築という過程をスキップして行うことを可能にするのが、性風俗という場だろう。

しかし、ユキコさんの例を踏まえると、次のようにも整理できるのではないか。性

的接触に際しては、本来、身体を見せ合うに相応しいとされる親密な関係が構築される必要がある。そうした関係が成立したのち、互いの身体に触れ、触れられる。さらに、そうした触れ合いの積み重ねによって、言葉や時間の蓄積だけでは生み出せない、新たな親密さが構築されていく。こうした認識は「性的体験はただ感覚的な快楽のみであって、愛の深さを持たない場合もありうるが、また目立つほどの貪欲もない場合もありうる。生理的な刺激によって性欲が発動し、その結果、親密な人間関係が生まれることもあるし、生まれないこともある」（フロム1970, 123-124）というフロムの考察にも通ずるだろう。

２－３　ふれる・ふれられる

そもそも、ふれるということ、とりわけ身体に触れる・触れられるとはどのような事態なのだろうか。

伊藤亜紗は、人は自分の輪郭を見失うことがあるとし、その例としてうつを患った学者の話を取り上げている。その人は、布団の中で体を折りたたむときや、プールの中で落ち着くとき、自分の輪郭を実感できたのだという（伊藤2020, 62-63）。これを踏まえて伊藤は次のようにまとめる。

> 病のときほど危機的ではないにしても、私たちは、日々の生活のなかで自分の輪郭を見失い、不安にかられることがあります。そんなとき、ふと何かに包まれたり、何かを抱きしめたりすることで、精神的な安心を得たり、確かさの感覚を取り戻したりすることがあります。さわることでさわられ、そのことによって自分の存在を確認する。私たちが輪郭を見失ったとき、触覚の対称性が、確かな安らぎを与えてくれます（同前, 63）。

また、多田がインタビューを行った60代前半の男性は「本番がなくても構わない」として、次のように語る。「そういう中高年でも、抱擁（中略）なんていうの。抱き合うことが一つの癒しになる。（中略）一人でずっと生活してきたから、一人が（い）やじゃないけど、やっぱりたまにそばに誰か居てくれたらいい、ということです。甘えたりとか」（多田2009, 184-185（ママ））。一人で生活をするうちに、他者との関わりが希薄になり、自他の境界がぼやけていく。だからなのか、時折ひとに触れたくなる。

また、次のような例もある。いわゆるデブ専の性風俗にハマった男性は「太った女性に圧迫されていると“無”になれる」と語り、仕事で24時間数字を気にしてしまう日々に苦しむ中で、知人に勧められたデブ専の性風俗に行き「自分は世の中に存在しなくてもいいんだって思える感覚」にのめり込んだという（清田2020, 221）。この男性は最終的に射精も求めなくなり、ただ押しつぶされにいくだけになった。これは、日頃あまりに自己の輪郭が意識されているがために、女性との接触によってその輪郭がぼやけ、曖昧になることが、かえって意味を持っていると解釈できよう。それはもはや「ふれられる」というよりも、「ふれられる」ものとしての自己が存在しない、他者の身体によって押しつぶされ、その存在が立ち消えそうなものとしての自己こそがある、と

いう事態であろう。

他者の身体に触れることで、わたしたちは自分と他者との境界を感じることができる。あるいは、感じなくて済む。他者の身体に接するという営みを何度も繰り返すことで、自分の輪郭を何度も確かめていく、あるいはぼやかしていく、そういった作業の一環が、性風俗に行くということなのかもしれない。

一方で、あまりにも他者に「ふれられる」ことが多いことは、自己の境界を不安定にすることに繋がりかねない。「「ふれられる」とは、接触のデザインに関して、主導権を相手に渡すこと」である（伊藤2020, 100）。全盲の西島怜那さんは、街中で出会うひとに「裏切られる覚悟で」身を委ねることで生活を送っていた。それはいわば「人にふれられるたびに、不確実性を飛び越えてぐっと相手を信じる「ジャンプ」をしてい」（同前, 107）たのであり、そのジャンプの連続は、西島さんの境界がその度に揺らぐことを意味するだろう。

ただ、「ふれられる」ことのない、特定の他者とばかり共にいるというのも、自他の境界が曖昧になることを招くという意味では、望ましいことではないのかもしれない。鷲田清一は、坂部恵の「ふれる」論とアンジューの音声的皮膚の議論を交差させながら、ひとが音を通して「ふれる」経験について考察し、「異質なものとの触れの欠如が、しばしば気の振れを引き起こしてしまうのである」（鷲田2015, 190（ママ））と締めくくっている。

「ふれる」「ふれられる」という事態は、自他の境界を揺るがすわけだが、その揺らぎが多すぎても少なすぎても、世界が立ち行かなくなるのである。

２－４　労働がもたらした「ふれ」あい

性風俗において、金銭の授受によって、キャストは客に対して相応のサービスをしようと努める。キャストは、自身が望まないような行為であっても、客が望むのであれば（ルールの範囲内で）それを遂行するのである。日常生活で叶えることの困難な望みが特段あるわけではないとしても、自分のためだけにそばにいてくれる相手がいる、という状況は稀有なものではないか。その状況は性風俗だからこそ成立するものであろう。

ここで参照したい事例がある。15年以上様々なセックスワークに従事してきたマギーさんが、一度だけ怒った際の経験である。相手は50歳前後の客で、彼女からのはたらきかけに応じる様子がなかったという（田中2014, 51-52）。反応を見せない客に対し、嫌われることを覚悟で、強気な態度で臨むことにしたという。

田中＞なんか、聞いた？

マギー＞いや、言ってくれない。……「お子さん、いらっしゃるんですか」とか「結婚してるんですか」とかって言ったら。……「みんな、俺のことなんて見てない」みたいなことを言ったんですよ。びっくりして、「えーっ」みたいな。「そうだ」、そう思ってんだって。……そこで〔相手のことが少し分かって〕自分は楽になった。この人かなり孤独。……そこで、ちょっ

としんどくなくなったわけです。どういう人かが見えたから（同前, 52）。

このやりとりだけでも、労働だからこそ可能になったコミュニケーションが見て取れる。マギーさんは、対価を受け取る以上、その場の関係構築への責任を負っていたため、客に対して粘り強く働きかけを続けた。結果、客の内面を垣間見ることに成功したのである。

ただ、マギーさんと客とのやり取りにはまだ続きがある。最終的にマギーさんは、滅多にしない騎乗位の体勢で、客に対し「怒りが抑えられない感じ」になったという。本音は言わず「もう、ほら、早くイッて、もう疲れるし」と言った末、客を軽く叩いた。すると男性客は「叩かれたー」と言って射精をしたという（同前）。

この一連の語りに登場する男性客は、実に屈折した思いを抱えていたように読める。「みんな、俺のことなんて見てない」と言いながら、本当は「誰かに見てほしい」と思っているからこそ、マギーさんのもとへとやってきたのであろう。お金を払いさえすれば、おんなのこはその時間を自分のためだけに過ごしてくれるのだから。

他者との関わり方も弁えていない客に対して、仕事とは言えマギーさんが向き合い続け、その内面を垣間見ることに成功した。その文脈においては、マギーさんが客を叩いたという行為は、ただ単に相手とのコミュニケーションを放棄したというよりも、上辺ではない感情を客に対して発露させた（気が「ふれ」た）という事態なのであり、それこそ客のことを「見て」いたことの表れではないか。そして、客の「叩かれたー」という発言が、不満や怒りのみを意図するものに聞こえないのは、筆者だけだろうか。

3　日常性と非日常性が交差する場、性風俗

日常性と非日常性、その間でのゆらぎについて興味深い議論を展開している三重野卓の論を参照しつつ、これまで「遊び」「ふれあい」という側面から確認してきた性風俗における営みを、あらためて整理したい。

3－1　日常性と非日常性が交差する場、性風俗

まず三重野は、日常性空間が「生活の場」「労働の場」であり、非日常性空間は「遊びの場」であると区別する（三重野1991, 81）。両空間のなかで、日常性と非日常性は互いに浸透しあっている。非日常性としては「遊び、祝祭、夢、革命、狂気、暴力、ドラマ」（同上, 84）などが挙げられる。また、日常性は「連続した時間の流れ」、非日常性は「非連続性」であり、連続性の中に区切りをもたらすとも表現されている（三重野1990, 224）。

三重野が展開する議論の中でも興味深いのが「共現象」ということばである。

> 「生きる」ということは、その生活空間のなかで、存在し、人間関係を結び、相互作用を行ないながら、ひとつのまとまりをなすことをいみする。そして、その基礎にあり、現在、注目されている現象を、とりあえず「共」現象と命名すると、具体的には、共生、共振、共感、共鳴をあげることができる（三重野1991, 87-

88)。

さらに、「共生は日常性空間におけるもので、そのほかは、日常性空間とともに非日常性空間にも関わる」（同前, 89）のだという。また、共振が「振れ」なのに対し、共鳴においては「リズム」という言葉が用いられている（同前, 87-88)。

よって、遊びの中で「共振、共感、共鳴」といった「共現象」が発生しているものと理解した上で、遊びや演技について再度検討したい。「遊びの構造は、対向にではなく、同調にある。それは（中略）ゆきつもどりつするひとつの遊動にともに乗りあわせる同調である」(西村1989, 102)。「ふたつの主体が行動のなかでそれぞれの役を演じ、協力するにせよ、対立するにせよ、ひとつの舞台のうへで緊張関係を結び、そこでたがひに共同のリズムを作ってゐる」（山崎1983, 243)。異なる主体が、互いの調子に巻き込みつつ巻き込まれつつ、ひとつの調子をつくっていく営みが、遊びや演技において行われている。その中でわたしたちは他者と出会い、他者と共にあるのだ。そこには共振も共鳴も含まれていると言えよう。

また、今日の社会においては、（身体的な）ふれあいが発生する空間も、非日常性空間と捉えられよう。鷲田や伊藤が参照する坂部恵（1983）の「ふれるという体験にある相互嵌入の契機、ふれることは直ちにふれ合うことに通じるという相互性の契機、あるいはまたふれるということが、いわば自己を超えてあふれ出て、他者のいのちにふれ合い、参入するという契機」（坂部1983, 27）ということばは、「「生きる」ということは、その生活空間のなかで、存在し、人間関係を結び、相互作用を行ないながら、ひとつのまとまりをなすこと」（三重野1991, 87-88）ということばにそぐわないものではない。また、鷲田は「さわる」と「ふれる」を区別し、前者は共振や共鳴を受け入れがたいものと論じている（鷲田2015, 183-184)。よって、「ふれる」ことの中にこそ、「共」現象が立ちあらわれると言えよう。

では、日常性や非日常性を導入して、男性客の営みを捉え直したい。飛田新地での擬似恋愛や異常性癖といった虚構の実現は、まさしく非日常性との接触と言えよう。安定した日常の一方で、時折そうした非日常性に没入しているのである。また、仕事に追われる男性客が、おんなのこの身体に押しつぶされ「無になる」ことを求めたのは、目まぐるしく落ち着かない日常性空間でのリズムからの逃避として、リズムや振れのない自他未分化の「非日常性」（この男性客にとっては、リズムや振れを持たないものこそが非日常性を帯びる）への没入を求めたからではないか。はたまた、プレイの前後に愚痴や弱音をこぼすのは、非日常性と日常性が混在する中で、自己変容が起こった結果と言えようか。

ここまで、性風俗での遊びがはらむ非日常性とその意義を論じてきたが、それは日常性の軽視を意図しない。習慣化された行動によって成り立つものが日常性および日常性空間であり、その安定によってこそ、非日常性との接触によるゆらぎが発生しても、生活のリズムが崩壊することなく続いていく。日常が安定しているがゆえに、性風俗において紡がれる、非日常性や非日常性空間と関わるような関係が成立可能なのであり、逆も然りなのである。

客によって、性風俗という場所が日常性を帯びている場合もあれば、生活空間における唯一の非日常性に満ちた場所であるかもしれない。どちらにせよ、男性客とは、時折日常性空間から離れて性風俗へと向かい、そこでの遊びやふれあいを通して、日常性と非日常性の間をゆらぎ、自己の輪郭を取り戻し、各々の日常性空間へとかえっていく、その繰り返しの中で生きている存在なのではないか。

３－２　社会の「遊び」としての性風俗

ただ、日常性と非日常性の間をゆらぐ営みとしての、ふれあいや虚構を多分に含んだ遊びが成立しうるのは、性風俗が非日常性空間だからであるのは疑いようがない。性風俗に向かう客は、日常性と非日常性を往還するゆらぎという遊びの中にいるのだが、性風俗という場自体も、社会全体における余白としての「遊び」であると言えるのではないか。

今日の社会において、非日常性と日常性の相互浸透やそこでのゆらぎを可能にする非日常性空間は、どれほど存在しているのだろうか。かつての労働の場は、大沢が言うように社会的欲求を満たす側面も孕んでいた「共現象」の起こりうる空間であった。今日の労働空間は、効率と生産性を旗印に統制され、それらを乱すゆらぎが入り込む余地を与えない。遊びの場さえも余暇産業に取り囲まれ、労働者は遊びへの欲求を駆り立てられるようにして、遊びに向かう（大沢1994, 169-173）。それはもはや第二の労働と形容する方が相応しい。

一方で、虚構の具現化も身体的接触も許容する、何よりそれを労働によって成立させながらも、遊びの可能性を残しているのが性風俗という場である。この場所は、非日常性空間として、今日の社会にその位置を占めているのではないか。

清田隆之は、性風俗に向かう男性たちの様々な欲求について触れた上で「実は複雑で様々な欲求が内在しているにもかかわらず、それらを「性欲」という便利な言葉でパッケージングし、そのことに無自覚なままサービス対象外のものも含めてまるっと風俗で解消しようというのは、極めて浅ましい行為ではないだろうか」（清田2020, 224）と批判する。

ただ、個別の欲求に対して鈍感なために、一括りに「性欲」と名付けられてしまうのは、裏を返せば、様々な欲求が連続性を持っていることの証左ではなかろうか。ここまで、男性客が性風俗において行う営みのありようを、様々な角度から描いてきたつもりである。そこには、決して一括りにはできない欲求や、性的快楽だけには還元しきれないようなよろこびがあらわれていた。ただ、そうした欲望に個別に名前をつけることなく、「性欲」を満たす「遊び」として、彼らを受け止めるのが性風俗という場なのである。しきりに分類し、名前をつけ、その空間における営みの「ゆらぎ」をなくそうとすることは、そんなにも重要だろうか。むしろ、性風俗という、労働と遊びのどちらの側面も持つようなあいまいな存在に、居心地の悪さを感じるということが、社会におけるゆらぎの可能性を淘汰し、日常性で埋め尽くされた社会（そんなもの成立不可能だとは思うが）を志向することにほかならない。果たしてそんな社会では、どんな生活・人間像が待ち受けているのか。

今日の社会において、遊びやふれあいを担保する非日常性空間は限られている。その一つが性風俗であるようだ。そこで営まれるプレイの内容は多岐にわたる上、そこで充足される欲求も様々あるようである。しかし、それらをすべて「性欲」として、性風俗という場は受け止める。そうした欲求のもとで誰かと共にあることを通して、非日常性にふれるこの一連の遊びは、性風俗が労働であるからこそ実現可能である。日常生活と一線を画す場が可能にする虚構に興じることと、その中でひとと肌を合わせるということが、どれだけ稀有なものか。そこに渦巻く欲求が、歪で、独りよがりで、弱さやずるさの見え隠れするものであったとしても、そこでしか起こり得ないような営みが、そこでしか紡がれ得ないようなひととひとのつながりがあるということだけは、確かなのではないか。

おわりに　日常と非日常のあわいで、ゆらいで

性風俗で提供されるべきサービスは（ルールやマナー、キャストへの侵襲性などの観点に立てば）ある程度限られるのであり、その範疇を超えてまで要求が叶えられるべきではない。そういった主張をしたいのではない。ただ、プレイという、料金とサービスの等価交換でなされる行為の一環とあらわすには、偶発的で、対価に見合うサービスを少し超え出ていくような余剰は、性や労働といった枠組みでは捉えられない「ふれ」の部分ではないか。この「ふれ」が起こる可能性を秘めているのは、日常性と非日常性の交差を可能にする、社会における「遊び」の場たる、性風俗だからこそであろう。

遊びとふれあいが引き起こすゆらぎのもたらす力が、大きく、あやしいからこそ、もっぱらタブーとして扱われるなど、極端な形でしか、性風俗での営みは描かれてこなかったのではないか。だからといって、性風俗という存在を「日常」のものにしようとか、そこまで大袈裟なことを本稿は求めていないし、第一そうした発想は本末転倒である。

今回は男性客のみに着目した。男性だからこそ垣間見える一面、として触れたような箇所もあったが、本研究を通して確認してきた男性客の振る舞いは、果たして、彼らや、彼らが有する男性性に特有のものばかりであっただろうか。筆者は女性として生活している。女性用性風俗を利用したことはない。ただ、男性客について知ることは、未知との遭遇というよりも、時に既視感・親近感さえ覚えるものであった。だからこそ、男性客を社会の外れ者や悪者として、切り離す気にはなれなかった。むしろ、筆者も彼らと同じかもしれない、と引き受けて、彼らと共にゆらぐことの方に可能性を見出そうとしたのである。

男性客の営みに焦点を当てることは、その営みを肯定することでも否定することでもない。当然だが、男性客による暴力的な言動を棚上げにすることを意味しない。働き手が被っている不当な待遇を不問に付すものでもない。性風俗の存在が、あらゆる性加害をも容認する理由に使われていいはずがない。本研究を通じて、そのいずれとも違う形で、性風俗での遊びが、社会において、ひとにとって、何をもたらすのか、考えてきたつもりである。

さまざまな二項対立の図式を超えた先にある、性風俗についてのさらなる議論と、

そうした議論がもたらす新たな展開に期待し、筆を置くこととする。

参考文献

SWASH. 2018『セックスワーク・スタディーズ 当事者視点で考える性と労働』日本評論社.
伊藤亜紗. 2020『手の倫理』講談社.
伊藤公雄. 1996『男性学入門』作品社.
井上理津子. 2011『さいごの色街 飛田』筑摩書房.
エーリッヒ・フロム. 1970『希望の革命 ── 改訂版』作田啓一・佐野哲郎訳. 紀伊国屋書店.
大沢正道. 1994『労働と遊戯の弁証法』紀伊国屋書店.
小野一光. 2016『震災風俗嬢』太田出版.
清田隆之. 2020『さよなら、俺たち』スタンド・ブックス.
熊田陽子. 2017『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィ　SM・関係性・「自己」がつむぐもの』明石書店.
坂爪真吾. 2016『性風俗のいびつな現場』筑摩書房.
坂部恵. 1983『「ふれる」ことの哲学 人称的世界とその根底』岩波書店.
澁谷知美. 2009『平成オトコ塾 ── 悩める男子のための全6章』筑摩書房.
杉田聡. 1999『男権主義的セクシュアリティ ポルノ・売買春擁護論批判』青木書店.
多田良子「「エッチごっこ」に向かう男たち ── 性風俗利用における「対人感度」」宮台真司・辻泉・岡井崇之編. 2009『「男らしさの快楽」ポピュラー文化から見たその実態』勁草書房.
立岩真也「何が〈性の商品化〉に抵抗するのか」江原由美子編. 1995『性の商品化　フェミニズムの主張2』勁草書房.
谷口和憲. 1997『性を買う男』パンドラ.
田中雅一. 2014「『やっとホントの顔を見せてくれたね！』: 日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」『コンタクト・ゾーン』6巻.
田房永子. 2015『男しか行けない場所に女が行ってきました』イースト・プレス.
中塩智恵子. 2018『男娼』光文社.
中村うさぎ編著. 2017『エッチなお仕事なぜいけないの？ 売春の是非を考える本』ポット出版プラス.
西井開. 2021『「非モテ」からはじめる男性学』集英社.
西村清和. 1989『遊びの現象学』勁草書房.
ホイジンガ. 2019『ホモ・ルーデンス』高橋英夫訳. 改版. 中央公論新社.
ポール・ショシャール. 1957『動物の社会・人間の社会』吉倉範光訳. 白水社.
松沢呉一編. 2000『ワタシが決めた』ポット出版.
三重野卓「日常性と非日常性が交差するとき」, 1991『現代社会学研究』4巻.
三重野卓「「生活の質」の概念と基礎論理 ── その断片的人間観を超えて」. 1990『社会保障研究』26巻 3 号.
山崎正和. 1983『演技する精神』中央公論社.

ルートヴィヒ・クラーゲス. 2017『リズムの本質』杉浦實訳. 新装版. みすず書房.
若尾典子.「性の自己決定権と性業者・買春者」朝倉むつ子・戒能民江・若尾典子. 2004『フェミニズム法学　生活と法の新しい関係』明石書店.
鷲田清一. 2015『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』筑摩書房.

（しだ・ころも）